

本部委員会の審議内容

公益社団法人 鉄道貨物協会

輸送品質向上委員会 (H27.2.20)

平成26年度第8回輸送品質向上委員会では、次の2項目について審議された。

1. 平成26年度本部委員会報告書へのまとめについて

平成26年度本部委員会報告書については、委員会にて審議承認され、これより編成作業に入ることも承認された。

今回は、前月号に引き続き、年間テーマ「鉄道コンテナ輸送の輸送品質向上に向けた荷擦れ・荷崩れ対策に関する調査研究と提案」に基づくヒアリング調査により得られた実際の養生事例を、誌面に限りがあるため、一部抜粋して紹介する。

A. 金属製品

「アルミ製コイル」

大型のアルミ製コイルの荷姿は木製架台であった。養生としては、ラッシングベルト及び木製パレットを用いた固縛が行われている。

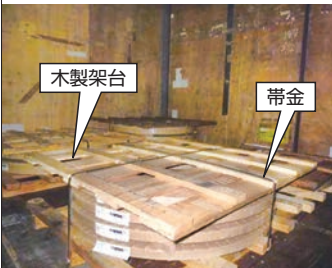


図1 荷姿の状況(改善前)



図2 荷姿の状況(改善後)

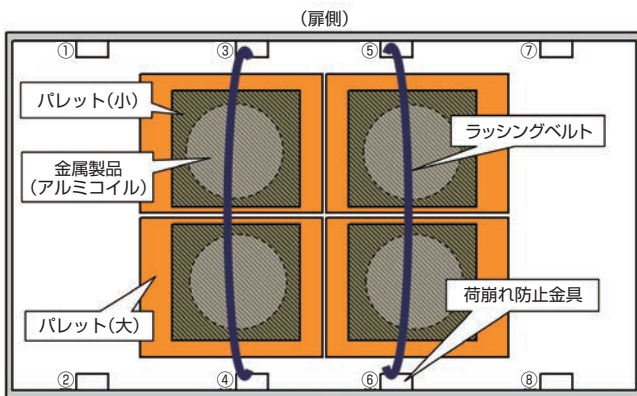


図3 コンテナ上方から見た模式図

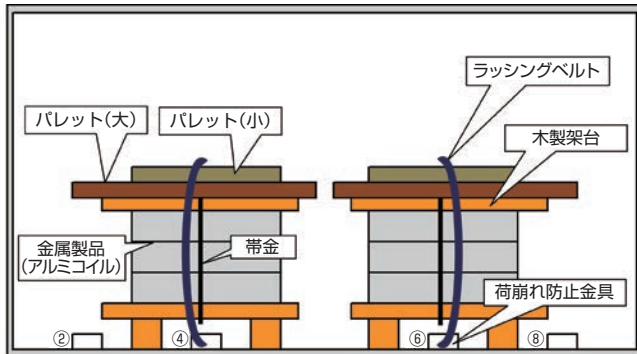


図4 コンテナドア側からみた模式図

B. 自動車部品

・船舶輸送で使用されている鉄製パレットが流用されていた。養生としては、a) 防振資材、b) ゴムバンド、c) 隙間充填ボード、d) 防振材であった。防振資材導入後の荷物事故発生率は年1~2回程度と成果が得られている。防振材を貼付したベニヤ板をコンテナ床面に敷きつめることから、内容積確保の

ため20形式コンテナ(背高タイプ)を限定使用している。

・ある程度の初期費用がかかることから、一定の出荷量が確保できる荷主に使用が限られる面がある。



図1 防振資材(表面)

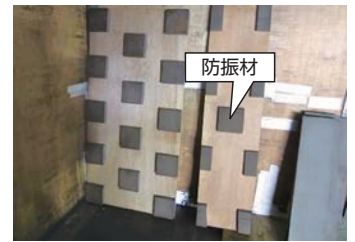


図2 防振資材(裏面)



図3 コンテナの床面

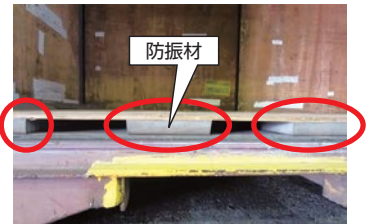


図4 防振材



図5 養生後の荷姿①



図6 養生後の荷姿②



図7 コンテナ積載時①

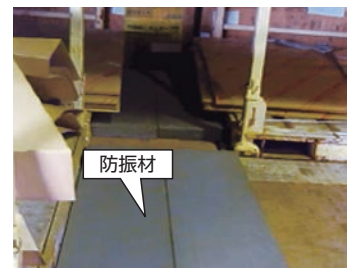


図8 コンテナ積載時②



図9 コンテナ積載時③



図10 コンテナ積載時④

C. コンクリート製品

・パレット積みされており、養生としてはラッシングベルトと角当てを使用した固縛、段ボールを使用した隙間埋めであった。従来はフォークリフトのチルトによる左右方向の荷崩れ防止を目的として2パレット当たりラッシングベルト1本で固定していた。しかしながら、左右方向の荷崩れは防止できたものの、前後方向(進行方向)の製品飛び出しは収束しなかったことから、2パレット当たりラッシングベルト2本で固定する養生を施したところ、製品の飛び出しが抑えられた。



図1 コンクリート製品の養生例(改善後)

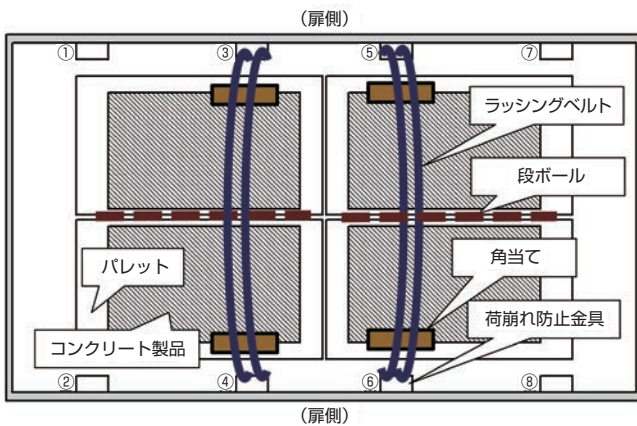


図2 コンクリート製品積載時の養生(コンテナ上方から見た模式図)

2. 来年度の審議テーマ(案)の選定について

A. 年間テーマ

「鉄道コンテナ輸送の輸送品質向上に向けた荷擦れ・荷崩れ対策に関する調査研究と提案Ⅱ」

B. サブテーマ

「鉄道コンテナ輸送用防振資材の実用化検証調査」

C. 年間・サブテーマの調査目的及び内容等は、平成27年度第1回の委員会にて再度確認されるので、マンスリーかもつ5月号にて紹介予定である。

利用促進委員会 (H27.2.17)

平成26年度第8回利用促進委員会では、年間テーマおよびサブテーマのまとめと来年度の審議テーマ(案)について審議された。

1. 年間テーマ『鉄道コンテナ輸送の利用促進に向けた業種別の利用実態把握・課題の抽出と提案』

日本経済においては、中期的には1%台の実質経済成長が見込まれるものの、国内生産の伸び悩みや減少などを背景に国内貨物総輸送量は微減傾向で推移するものと予測される。一方、足元では、国内輸送で大宗を占めるトラック輸送においてトラックドライバー不足といった供給側の制約があることなどを背景に、鉄道コンテナ輸送量については小幅な増加が見込まれる(注：鉄道コンテナ輸送でもオンレール、集配両面において供給力の制約があるが、当面は供給力不足には陥らないものと想定する)。

平成25年度調査において明らかになったように、トラックドライバー不足問題はいつそう深刻化する可能性があるため、今後、荷主企業のみならず物流事業者などからも鉄道・海運へのモーダルシフトに対するニーズが高まるものと推測される(注：その一方で、円安の定着を受け、大手家電メーカーの一部において

は生産の国内回帰の動きが出始めている。加えて、原油価格の下落などトラック事業者や内航海運事業者・フェリー事業者に対する追い風が吹き始めていることもあって、トラック輸送や内航海運・フェリー輸送の競争力が高まる可能性も否定できない)。

しかし、現状においては主要幹線や貨物駅における容量不足といった物理的な課題があることに加え、荷主企業が要求するサービス水準と実際に提供されているサービス水準の間に乖離があることなどから、荷主企業が鉄道コンテナ輸送を利用したくても(あるいは利用を増やしたくても)できないというケースも少なからずあるものと考えられる。

そこで、本調査では、鉄道コンテナ輸送を利用している荷主企業における鉄道コンテナ輸送の利用の実態や利用拡大に向けた課題・要望等を業種別に把握することなどにより、さらなる利用拡大を図るための利用促進策について検討を行った。

前述の物理的な課題など一朝一夕には克服が困難なものもあるが、モーダルシフトの受け皿としての期待が高まるなかで、鉄道事業者および利用運送事業者には鉄道コンテナ輸送の利用促進に向けたいっそうの取り組みをお願いしたい。

2. サブテーマ『鉄道コンテナ輸送における養生材の効率的な回収システムについての調査研究と提言』

本調査研究においては、養生材メーカー、養生材販売・リース事業者に対するヒアリング調査を実施し、養生材の利用者からのニーズや課題などについて把握した。また、養生材の利用者である荷主企業や利用運送事業者、養生材処理業者に対するヒアリング調査を実施し、各社における養生材の利用状況、コストの負担主体、さらには養生材の回収から処理に至るまでの流れについてケーススタディを行い、現状における主要な養生材の回収システムの現状や問題点、利用後廃棄処理される養生材の処理方法や問題点などについても把握した。

また、養生材をより使いやすくすることに加え、養生材にかかる様々なコストの削減などを目的とした、養生材の効率的な回収システム(養生材プールシステム)の実現可能性等について検討するとともに、システム構築に向けた提言を行った。

当該システムに関しては、総論では賛成する向きが多かったものの、システムの管理・運営主体や養生材の管理方法など、実現に向けて検討すべき課題は多い。

一部の荷主企業からは「全国ネットワークを有する鉄道事業者がシステムの管理・運営主体として適当」という意見が聞かれる一方で、鉄道事業者側には「養生材の利用は利用運送事業者マターの話で、鉄道事業者には養生材の管理はできない」という認識がある。

荷主企業における輸送品質の向上に対するニーズが高まるなかで、養生材にかかるコストが今後さらに大きくなることが推測される。そうしたなかで、コストの削減と輸送品質向上を目指した当該システム構築に向けた検討を、養生材の利用者である荷主企業・利用運送事業者および鉄道事業者の間で進めていくことをお願いしたい。

もちろん、将来的には過剰な養生材を使用しなくても荷物事故が発生しないように、鉄道コンテナ輸送の品質向上を目指していくべきであることは言うまでもない。養生材の使用が少なくなれば、養生材にかかる様々なコスト削減に資するほか、荷主企業の庭先における貨物のスムーズな取卸しが可能になるなど、輸送全般にかかるメリットは非常に大きいものと推測される。

3. 平成27年度の審議テーマ(案)について

A. 年間テーマ

「鉄道コンテナ輸送の利用促進に向けた業種別の利用実態把握・課題の抽出と提案Ⅱ」

B. サブテーマ

「定温コンテナ輸送需要およびインフラ整備に関する調査研究」

C. 年間およびサブテーマの調査目的と内容

平成27年度第1回の委員会にて再度確認されるので、マンスリーかもつ5月号にて紹介予定である。